

今年の音楽祭のメイン作曲家はモーツァルト!

「神童」「天才」「早世」……

モーツァルトについて漠然としたイメージはあるけれど、

実際のモーツァルトはどんな人物だったのか?

5つのキーワードで迫ります!!

文=堀 朋平 (音楽学者)



Wolfgang Amadeus Mozart

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
生年: 1756年 オーストリア・ザルツブルク
没年: 1791年 オーストリア・ウィーン

キーワードで読み解く

神に愛された音楽家

天才モーツァルトに

迫る!!

Keyword

2

旅と父



1763年に描かれたモーツァルト少年

Keyword

1

神童

テクニックもルックスも
持ち合わせる

とかく「神童」(神の子)というイメージは大作曲家に付きものだけれど、モーツァルトはその最たるもの。史実をいくつか挙げてみると、
① 6歳にしてカンペキに整ったピアノ曲を書く
② 可愛らしいルックスで祖国の女帝にキスされる
③ ある宮廷奏者に「僕のこと、好き?」と愛を問う……そんな幼い愛の神工ロスのごとき性格は、無垢な音世界と一つになって、「永遠の子供」というイメージが定着した。ほとんど「神話」と言ってもいいレベルだろう。

ヨーロッパ各地を 父に伴われて演奏旅行

馬車で巡った。6歳にして国際派の音楽家だったのだ。
中でも大がかりだったのが、6歳の

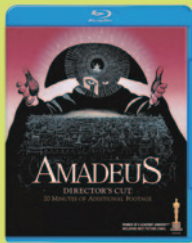
音楽のスタイルが大きく変わろうとする、めざましい転換期にモーツァルトは生きた。生地ザルツブルクは音楽の聖地とはほど遠い街だったから、各地の音楽事情を吸収し、「神童」ぶりを広くアピールし、そして一流の音楽家として身を立てるには、自分の足でヨーロッパ各地を巡るしかなかった。
そんな「音楽の旅」にバツグンの才能を発揮したのが、父レオポルトである。自らヴァイオリンの指南書を書き(今日でも第一級の文献だ)、金銭の計算やこまごました準備を得意とする几帳面な性格の父は、幼いモーツァルトと姉ナンネル、時には母マリア・アナをともなつて、名だたる音楽都市を

ときの「西方大旅行」だ。
ドイツの大都市のほか、パリ、ロンドン、ベルギーやオランダの諸都市……一家4人はじつに3年半にわたり、時には病気で命の危機に瀕しつつも旅をつづけた。教育パパにして優秀なマネージャー。父はなくして「神童」の存在はなかったかもしれない。



演奏旅行で訪れた
オーストリア・ウィーンの
シェンブルン宮殿

モーツァルトをもっとよく知る！
おすすめ映画



『アマデウス』

モーツァルトといえば真っ先に挙がる作品。1984年にブロードウェイの舞台『アマデウス』を映画化、アカデミー賞8部門を獲得した。モーツァルトのライバルとされたサリエリが回想するという形で物語が進む。

ブルーレイ ¥2,381(税抜) / DVD ¥1,429(税抜)
ワーナー・ブラザース ホームエンターテイメント

Program Content, Artwork & Photography © 1984 The Saul Zaentz Company. All rights reserved. 'ACADEMY AWARDS' is the registered trademark and service mark of the Academy of Motion Picture Arts and Sciences.



妻コンスタンツェ。モーツァルトと共に浪費家だったと言われているが……

自由な作曲家は、活動を自分でマネジメントしなくてはならない。浪費癖や遊戯好き(ビリヤードやカードゲームは大のお金に入り)が高じて借金をこしらえ、無心の手紙を八方に書いていた。ただし、激動のウィーンで財政難はよく見られることだったし、モーツァルトが楽譜出版やレッスンや宮廷の給料など、相当の金額を稼いでいたことは意外に知られていない。ソロモンという研究者の試算によれば、最晩年の収入は3600〜5600グルデンに上るといふ。換算は難しいが、2000〜3500万円くらいと考えておけば大きく外れないだろう。人もつらやむ額である。



母マリア・アンナ

自由な作曲家は、活動を自分でマネジメントしなくてはならない。浪費癖や遊戯好き(ビリヤードやカードゲームは大のお金に入り)が高じて借金をこしらえ、無心の手紙を八方に書いていた。ただし、激動のウィーンで財政難はよく見られることだったし、モーツァルトが楽譜出版やレッスンや宮廷の給料など、相当の金額を稼いでいたことは意外に知られていない。ソロモンという研究者の試算によれば、最晩年の収入は3600〜5600グルデンに上るといふ。換算は難しいが、2000〜3500万円くらいと考えておけば大きく外れないだろう。人もつらやむ額である。

Keyword

3

自由

「エディプスコンプレクス」というフロイトの言葉があるように、人間には目の上のたんこぶとの葛藤が宿命づけられているのだろうか？ 最初の戦いは、故郷ザルツブルクの大神父コロレドとの間で繰り広げられた。「小僧」「バカ」「出てゆけ！……ついに憤懣は爆発した。かくして1781年、25歳の作曲家はウィーンでの活動を開始する。この年は、音楽家が「宮仕え」をやめて「フリー」となる、音楽史上の大転換でもあったのだ。もっと強大な「主」もいた。体の弱い母が旅先のパリで亡くなった時でさえ、

宮仕えと父から自由になる

一緒にいた息子の責任を追及する父。自立後も「あまり金は使うな」とか「お前は世間が何もわからんのだから」といった手紙で息子を「永遠の子供」扱する父。遠い故郷で老いてゆくそんな父を手紙で茶化すいっぽう、父がウィーンを訪れた際には、新妻コンスタンツェとともに厚く歓迎している。

モーツァルトは「父離れ」によって「子供」を卒業し、一個の人間として羽ばたくことができたが、離れたはずのその父は、しょっちゅう息子のもとに回帰した。「自由」とは難しいものである。

Keyword

4

金

稼ぎも使い方も破格



モーツァルトの雇い主だったザルツブルクのコロレド大神父

Keyword

5

涅槃

「緩徐楽章」でモーツァルトを知る

モーツァルトの音楽そのものの魅力も、一ただけ語りた。静かな第2楽章だ。ハイドゥンやベートーヴェンとは違って、両端のアレグロ楽章に束の間だけ現れる静穏ではなく、まさに作品の焦点となる、永遠につづく愛いなき時間。水平線すら見えない、広大な海に浮かんでいるような……言ってみれば、仏教という「涅槃(ニルヴァーナ)」に近い状態ではないだろうか？ だがそんな静穏にも、後期——とくに母が亡くなる1778年以降——になると、無限の感情が波立つようになる。「緩徐楽章」を道しるべに、この音楽祭を楽しませてはいかがだろうか。